



TITLE:

生計學と經濟學の閒

AUTHOR(S):

森, 時彦

CITATION:

森, 時彦. 生計學と經濟學の閒. 東方學報 2000, 72: 503-523

ISSUE DATE:

2000-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66821>

RIGHT:

生計學と經濟學の間

森 時 彦

はじめに.....	五〇三	三 「經濟」との葛藤.....	五一四
一 Political Economy の譯語を求めて.....	五〇五	四 口語と文語.....	五一八
二 「生計」の考案.....	五〇九	むすび.....	五二〇

はじめに

日本亡命後の梁啓超は、日本語譯の書物を通じて西歐近代學術思想の受容につとめたばかりでなく、意識的に日本語譯の語彙をそのまま自らの文章に引用して、「新文體」と自稱する清新な文體を創出する試みもすすめた。周知のように嚴復は、英語の書物を翻譯するにあたっては、すでに日本語に定着していた譯語は極力忌避し、中國の古義に則った典雅な譯語の考案に腐心したといわれるが、梁啓超はぎやくに日本語譯の語彙を積極的に取り入れることで、新しい概念を盛るにふさわしい皮袋を用意しようとしたのである。

日本亡命時期における梁啓超のキーワードといってもよい Evolution の譯語を例にとると、最初のうちは嚴復の考案

した「天演」という語彙が遵用されていたが、一九〇二年の半ばから一九〇三年にかけて、當時日本で流布していた「進化」という語彙への轉換がはじまり、以後しだいに定着していった。「民族帝國主義」の競争世界において中國民族生存の處方箋を國民國家の形成に求めようとしていたこの時期、梁啓超は「天演」よりも「進化」の方がその切迫感をかきたてるのによりふさわしい語感をもつものと判断したのであろう。「智學」から「哲學」、「名學」から「論理學」、「重學」から「物理學」等々の轉換がおこったのもほぼ同じ頃のものである。この時期をさかいに、梁啓超の文章には日本語譯の語彙が多用されるようになり、その明晰な論旨とあいまって、とりわけ日本人には親しみやすく、読みやすい「新文體」が創出された。

ところが、國民國家形成を促す兩輪の一つと目された Political Economy あるいは Economics の譯語だけは、このような轉換のプロセスとは異なる軌跡をたどった。これらの譯語としては、梁啓超の創案にかかる「生計學」という語彙と、當時の日本で定着しつつあった「經濟學」という語彙が、終生梁啓超の文章の中で角逐を續けたのである。本稿ではこれら二つの語彙について、その用例を李國俊『梁啓超著述繫年』（復旦大學出版社 一九八六年）にしたがって年代順に整理した結果にもとづき、その作業から浮び上ってきた一定の傾向の分析を通じて、Political Economy あるいは Economics というジャンルの西歐近代學說が、梁啓超の知的營爲全體のなかでどのような位置を占めたかを考究し、ひいては西歐近代學說の受容にあたって梁啓超のとったスタンスの一端をも明らかにすることを目指している。

全體の見通しを豫め把握できるように、梁啓超が Political Economy あるいは Economics の譯語として使用した語彙の變遷について、大まかな時期區分を示せば以下のようになる。

一、一九〇二年五月まで

模索期

二、一九〇二年五月—一九〇六年三月

「生計」期

三、一九〇六年三月—一九一〇年二月

「經濟」期

四、一九一〇年二月—一九一二年一〇月

「生計」回歸期

五、一九一二年一〇月—一九二〇年一〇月

並用期

六、一九二〇年一〇月以降

超克期

本稿の構成は、第一、二期にそれぞれ一章を當て、第三、四期を第三章、第五期を第四章、第六期をむすびの部分で扱う豫定である。用例は一部を除き、中國語の原文をできるかぎり尊重しながら引用した。冗長化を避けると同時に、「新文體」の雰圍氣のなかで語彙の用法變化を觀察したいという意圖からである。なお本稿はもっぱら語彙變遷の分析に終始するが、内容の變遷については、拙稿「梁啓超の經濟思想」（狹間直樹編『共同研究 梁啓超』みすず書房 一九九九年）を参照していただきたい。

1 Political Economy の譯語を求めて

一九〇二年は梁啓超にとって思案の年であった。二月に創刊した『新民叢報』は、『新民說』を始めとして、西歐近代社會の到達した最高の組織形態と考えられる國民國家の原理を中心に、新しい概念、新しい知識を中國の思想界に迅速かつ大量に移植することをめざす論文が目白押しであった。『新民叢報』に設けられた「新智識之雜貨店」というコラムの名稱が象徴するように、西歐近代の新しい知識、新しい概念を幅廣くしかも同時並行的に伝えるには、それにふさわしい數多の新語彙をとにかくにも早急に準備する必要があった。その悩みを解消してくれたのが、西歐近代學說の移植にすでに一定の蓄積を有していた日本の學術界であった。亡命以來三年あまり、その間に閱讀した日本語譯の西歐近代の學術

書は、政治、經濟、社會、哲學、宗教などあらゆるジャンルにわたり、梁啓超は「幽室に日を見、枯腹に酒を得」（『飲冰室文集』四、八〇頁）のように、未知の知識世界に誘われたという。それら翻譯書に用いられているタームは、多くがすでに日本語として定着しているものであった。梁啓超は躊躇することなくこれら日本語の語彙を借用して、差し迫った需要を満たすことにした。「進化」という語彙を始めとして日本語から借用した數多のタームが、『新民叢報』に滿載される梁啓超の文章を飾ることになった。

しかしながら、國民國家形成の重要な柱になるジャンルの Political Economy あるいは Economics だけは、かなり事情が異なっていた。梁啓超はこの語彙にかぎっては、當時の日本ではほぼ定着していた「經濟學」という譯語に終始、違和感と物足りなさを感じており、自ら最適の譯語を創出するために思案をめぐらしていた。その思索の跡を探る作業に入る前に、まず一九〇二年に至るまでの過程を一瞥しておきたい。

亡命前から亡命當初にかけての梁啓超は、比較的早くから Political Economy あるいは Economics の譯語として日本語には「經濟學」というタームがあることは認知していたが、自らの文章を綴るにあたっては、京師同文館、江南製造局などの出版した翻譯書、あるいは鄭觀應²など所謂開港場知識人の著作に用いられているいくつかの語彙をあこれ試用していた。

『時務報』第二九冊（一八九七年六月一〇日）の『變法通議（二）』論譯書では「彼中富國學之書（日本名爲經濟書）、皆合地球萬國之民情物產、而盈虛消息之」（『飲冰室文集』一、七一頁）と日本語の「經濟學」に相當するとの認識を示しながら「富國學」という言葉を用いている。『時務報』第三五冊（一八九七年八月八日）の「史記貨殖列傳今義」は「西士講富國學、倡論日益盛、持議日益精」「故言理財之學者、當竝國之差別界限而無之」（『飲冰室文集』二、三五～三六頁）のように、「富國學」と「理財學」が混在している。さらに『時務報』第四二冊（一八九七年一〇月一六日）の「大

同譯書局敍例、『清議報』第一九冊（一八九九年六月二八日）の「論内地雜居與商務關係」、『清議報』第二一冊（一八九九年七月一八日）の「論商業會議所之益」などでは、「商學」あるいは「商務」といった言葉が使用されている。

また『清議報』第七冊（一八九九年三月二日）の「愛國論」および『清議報』第一〇冊（一八九九年四月一日）の「論學日本文之益」では「資生學」が用いられるが、後者では「資生學（即理財學、日本謂之經濟學）」（『飲冰室文集』四、八〇頁）との割注が附されている。さらに一八九九年夏に、羅普の指導に習って作成したといわれる『和文漢讀法』⁽³⁾でも、「夢花蘆氏増刊」本と稱される版本には、八五頁におよぶグロッサリーが附されているが、その中に「經濟 理財學、資生學」（八三頁）の一項がある。

もちろんこの時期にも、「生計」あるいは「經濟」の用例がまったく見られないわけではない。『清議報』第二冊（一八九九年一月二日）の『變法通議(二)』論變法必自平滿漢之界始および『清議報』第四冊（一八九九年一月二二日）の『變法通議(二)』論變法後安置守舊大臣之法には、「四曰廣生計……八旗生計、爲數百年來談治家之一大問題」（『飲冰室文集』一、八二頁）とか「變法之後、此等當盡撤、則雖有舊官、而生計殆絕矣」（同前九二頁）といった文章があるが、いずれも舊來の文脈で使用されており、Economy の譯語とは考えにくい。また『清議報』第二二冊（一八九九年七月二八日）の「讀孟子界說」では「井田不可行於後世無待言、迂儒斤斤思復之者妄也、法先王者法其意、井田之意、眞治天下第一義矣、故孟子一切經濟、皆從此出」（『飲冰室文集』三、一九頁）という例があるが、これも明らかに「經國濟世」という原義から逸脱するものではない。

この時期に Economy の譯語として「經濟」という語彙が用いられている例は、管見では三例ある。一例は『清議報』第一九冊（一八九九年六月二八日）「論中國人種之將來」の「十九世紀爲政治上競爭革命之時代、二十世紀爲經濟上競爭革命之時代……以中國四百兆人之資本勞力、插入於全世界經濟競爭之場」（『飲冰室文集』三、五三頁）、もう一例は『清

『議報』第二六冊（一八九九年九月五日）「論中國與歐洲國體異同」の「經濟世界之競争、月異而歲不同」（『飲冰室文集』四、六七頁）、最後の一例は『清議報』第三〇冊（一八九九年一〇月二五日）「論近世國民競争之大勢及中國前途」の「故其争也……非屬於政治之事、而屬於經濟（用日本名、今譯之爲資生）之事」（同前五九頁）である。狭間直樹氏の調査によると、第一例はもとも博文堂の雑誌『大帝國』の第一卷第三號（一八九九年七月一五日）に掲載するために執筆したものであり、第二例も博文館の総合雑誌『太陽』の第五卷第二〇號（一八九九年九月五日）からの轉載である。いずれも日本人向けに執筆した文章だけに、日本語になじんだ「經濟」という言葉を意識的に使用したのであろう。とくに第一例には「日本語の文體に倣って書いたため、冗長に流れてしまった點は御容赦を乞う」との筆者の斷り書きがついている。第三例は日本人向けではないが、「日本語の語彙を用いた」という割注がわざわざ附いているところから見ると、中國語に轉用しようという意圖はまだなかったように思われる。この時期梁啓超は、Economy の譯語としての「經濟」という言葉をあくまで日本語として扱っていたのであり、主には日本人向けの文章にたまに用いる程度であった。

以上のように亡命前から亡命後一九〇二年までは、當時中國で流布していたいくつかの語彙から日本語まで、それぞれのシチュエーションに應じて、梁啓超はさまざまな語彙を試行的に使用していた。しかし一九〇二年二月に『新民叢報』を創刊することになると、ある定まった譯語を Political Economy に當てる必要にせまられた。『新民叢報』創刊の目的は、「國民公德の缺乏」という中國人の缺點を治癒することに置かれたが、それは換言すれば國民國家形成の精神的基盤を整備することに等しい。國民國家形成の前提條件が政治、經濟兩面における國內統一にあるとすれば、政治學と經濟學はいわば國民國家學說の車の兩輪をなすものであった。これら兩輪のうち、經濟學の方についてはまだ定まった語彙をもっていないかった梁啓超は、國民國家をめぐる議論を展開するに當たって、どうしても適切な語彙を定める必要があったのである。

二 「生計」の考案

この問題ははやくも創刊號（一九〇二年二月八日）から『新民叢報』誌上で議論がはじめられた。「紹介新著」欄で英國斯密亞丹著、嚴復譯『原富』をとりあげた梁啓超は、原著者のアダム・スミスを「政術理財學之鼻祖」と紹介し、その後「英文 Political Economy」中國未有此名詞、日本人譯爲經濟學、實屬不安、嚴氏欲譯爲計學、然亦未賅括、姑就原文政治與計算兩意、擬爲此名、以質大雅」との割注を加えている。周知のように嚴復は、『原富』の「譯事例言」で、日本語譯の「經濟」は範圍が廣きにすぎ、中國語譯の「理財」は範圍が狹すぎるといふ理由から、いずれも採用せず、自ら考案した「計學」をあてると宣言した。これに對して梁啓超も、日本人の譯した「經濟學」では、原義との混同をまねく可能性があるので適當でないともみなす點では同意見であるが、嚴復の「計學」も意味が概括的でないうゑに、複合名詞をつくるのに不便であるとの理由から採用せず、とりあえず直譯に近い「政術理財學」といふ語彙を提起したのである。「先秦の文體を模倣」した嚴復の淵雅な文體は難解に過ぎ、古書を多讀している人でなければ、ほとんど理解できないといふ不滿を抱いていた梁啓超ではあるが、「經濟」といふ日本語に中國の古義との齟齬を懸念する感性だけは、桐城派の流れをくむ文人とも共有していたわけである。⁽⁵⁾

これに對して第三號（一九〇二年三月一〇日）の「問答」欄には、「東京愛讀生」を名乗る讀者から批判文が寄せられた。「政術理財學」は「經濟學」や「計學」に比べれば、少しは正確で概括的ではあるが、「四字の名を用いるのは冗長に過ぎる」。例えば日本語でいふ經濟界、經濟社會、經濟問題などの複合名詞は、「計」の一字で置き換えるわけにはいかないのは勿論であるが、「政術理財」の四字で置き換えるのも適切ではない。そこで「羣典に博通」されている主編の

梁啓超先生に「一雅馴の名を定め、以て末學に恵まれる」ようお願いするとして文章を結んでいる。

梁啓超の回答は「政術理財學の名が冗長で適さないことはまったく指摘のとおり」と、あっさりこの四字の語彙を放棄したうえで、古典にみえる二字の語彙を次々に吟味していくが、いずれも一長一短ありと退けられる。『漢書』に見える「食貨」は「この學の材料を包括してはいるが、ただその客體を有しているだけで、その主體を有していない」、「管子」にある「輕重」は「どうしても古名に求めるとすれば、最適」ではあるが、何分にも現在には通行していない語彙で「にわかに持ち出すと人の耳目を亂す」おそれがあり、また『史記』に用いる「貨殖」は「私富に偏り、政術の義を含まない」といった具合で、いずれも採用には躊躇がある。ここでの梁啓超の結論は、『史記』の「平準書」は「言うところはみな、朝廷理財の事」で、漢代の平準の制も「人羣全體の利益の爲」ではないから、もとより「Political Economy」の義に當てるには足りないが、「平準」の二字だけをとりだせば「均利宜民の意たるを失しない」、しかも『史記』から出た語彙であるから、だれでも一見で意味が分り、ほかの言葉と取り違えることもない、などの利點を列記して、「平準」に軍配をあげた。

實際、この問答と並行して『新民叢報』第二〇五號（一九〇二年二月二三日～四月八日）に連載された「論民族競爭之大勢」では、「三戰而掌握世界平準（日本所謂經濟、今擬易以此二字）之大權者、麥堅尼時代也」（『飲冰室文集』一〇、二二頁）あるいは「二十世紀之世界、雄於平準界者則爲強國、奮於平準界者則爲弱國、絕於平準界者則爲不國」（同前三二頁）といった例をはじめとして、すべて「平準」という語彙を驅使して、二十世紀が經濟の時代であることを力説し、この語彙使用の實踐に着手している。

しかしながらこの暫定案も、二ヶ月足らずで覆されることになる。『新民叢報』第七號（一九〇二年五月八日）から七回にわたる連載を開始した「生計學學說沿革小史」では、冒頭の「例言七則」の第五則で「茲學之名今尙未定、本編向用

平準二字、似未安、而嚴氏定爲計學、又嫌其於複用名詞頗有不便、或有謂當用生計二字者、今姑用之以俟後人」(『飲冰室文集』一二、二頁)と宣言している。『飲冰室文集』所載分には缺落しているが、原載の『新民叢報』では、表題の「生計學」にも「即平準學」との割注を施すという異例の措置がとられている。この「平準」から「生計」への轉換の經緯については、次の第八號(一九〇二年五月二二日)の「問答」欄で、さっそく寄せられた「駒場紅柳生」と名乗る人物の批判に對する反駁として詳しい辯明がなされている。

「駒場紅柳生」は、Political Economy が Marshall によつて Economics と改名された事實を指摘した上で、日本人がこれを「經濟學」と譯したのは、その理を究めずに性急に判斷すると、政治と混同しているように見えるかもしれないが、「經とは政治の義を含み、濟とは泉流の旨を寓しており、この學の本義とすでに極めて合致している」ことを認め、「日本が當時この名に定めたのは、蓋し細心に斟酌したうえで異議を遺していないもの」と評價している。それに對して、梁啓超の命名した語彙は、「平準學」がこの學に副わないのはもちろん、「生計學」も、Statistics の譯語と紛れるおそれのある嚴復の「計學」に比べればまだしもであるが、やはり範圍が小さすぎて「政治、理財の意をその中に包括できない」憾みがあると批判する。結局のところ、「泰西近世新發明の事理で、わが中國曠古未有のもの」は多々あるのだから、いちいち「わが中國固有の名辭」で貫徹するのは煩わしい。新異の語彙を考案して後世に誤りを遺すよりは、とりあえず定着している語彙を踏襲しておく方がよいが、それがだめなら日本語の「財政學」を當てておいてはどうかと提案する。

これに對して梁啓超は、「平準」という言葉がおさまりの悪いことは自覺しており、すでに放棄したと宣言するとともに、「計學」も Statistics と混同しやすく、しかも「經濟革命」といった複合名詞が、「計革命」では様にならないことにも同意する。しかしながら「經濟」という日本語を踏襲することには、どうしてもおさまりの悪さ(不安)を覺える、というのは「此の名は中國で太だ通行しており、學者の目を混じやすい」からである。また「經濟」という言葉が「西文

の原義」にびったり當てはまるという「駒場紅柳生」の見解に對しても残念ながら同意できない。まして「財政學」という提案は、日本における經濟學のジャンル分けを無視したもので、やはり同意できない。日本では經濟學を「純正經濟學」と「應用經濟學」に大別し、さらに「應用經濟學」の下に「經濟政策學（狹義の應用經濟學）」と「財政學」という二つの分野があり、「財政學」は經濟學のごく一部にすぎない⁽⁶⁾。以上のような消去法で、梁啓超は「生計學學說沿革小史」で提起した「生計」という語彙を當面使用しながら、後賢を待つこととしたが、最後にだめをおすように「日本語譯の諸學の名稱は多くは沿用してもよいが、ただ經濟學と社會學の兩者だけは、私見ではどうしても新しい名稱を求める必要がある」と結んでいる⁽⁷⁾。

何回かの應酬の末、梁啓超がとりあえず到達した「生計」という語彙は、この時期もっとも力をいれて執筆していた『新民說』でも、「生計學學說沿革小史」の連載がスタートしたのと同じ『新民叢報』第七號（一九〇二年五月八日）の「第九節論自由」から「四日生計上之自由（即日本所謂經濟上自由）……生計之自由者、資本家與勞力者相互而保其自由也」（『飲冰室專集』四、四〇頁）という文例で、さっそく使用がはじまり、以後「第十一節論進歩（一名論中國羣治不進之原因）」「第十二節論自尊」「第十四節論生利分利」「第十六節論義務思想」「第十八節論私德」「第十九節論政治能力」などの諸節で、「斯密破壞舊生計學、而新生計學乃興」（同前六二頁）「二十世紀、生計競爭之世界」（同前九五頁）といった用例が二十例ほど確認される。このほか、同じく第七號の「論中國學術思想變遷之大勢」でも「蓋全球生計學（即前論所屢稱之平準學）發達之早、未有吾中國若者也（余擬著一中國生計學史、搜集前哲所論、以與泰西學說相比較、若能成之、亦一壯觀也）」（『飲冰室文集』七、三二頁）という用例がある。

このように『新民叢報』第七號を期して Political Economy の譯語を「生計學」と改めた梁啓超は、その後『新民叢報』第七七、七八號（一九〇六年三月二五日、四月八日）の「中國法理學發達史論」までは、「進化論革命者頡頏之學說」

「新民議」「中國歷史上革命之研究」「新大陸游記節錄」等等ほとんどの文章でこの語彙を愛用している。とくに『新民叢報』第四〇・四一、四二・四三號（一九〇三年一月二日、二月二日（一九〇四年三月五月）⁸）の「二十世紀之巨靈托辣斯」、『新民叢報』第四六・四八合併號、四九號、五〇號、五二號、五六號（一九〇四年二月一四日、六月二八日、七月一三日、九月一〇日、十一月七日）の「中國貨幣問題」、『新民叢報』第五二・五四號、五六號（一九〇四年九月一〇日・一〇月九日、十一月七日）の「外資輸入問題」など三つの文章では、この語彙を多用している。もっともこれらの文章でも、「百年以來、『自由競争』Free Competition 一語、幾爲計學家之金科玉律」（『飲冰室文集』一四、三五頁）、「夫價廉則消費者食其利、消多用節則生產者仍食其利、計學公理必出於兩利、誠至言哉」（『飲冰室文集』一四、四八頁）のように「計學」が、また「苟外債使用之方法得其宜、可以大助長一國經濟之發達」（『飲冰室文集』一六、七八頁）、「讀者任取一經濟學書、無不有論述之者」（『飲冰室文集』一六、一〇六頁）のように「經濟」も、それぞれ二例だけ使われているが、その極めて低い比率から判斷すると、本來「生計」を用いるべきところを、ケアレスミスあるいは慣性から「計學」あるいは「經濟」が使われたもののように思われる。

さらにこの時期でも、『自由書』の「中國之社會主義」「記日本一政黨領袖之言」および「東籍月旦」などの文章では「經濟」が用いられているが、もともと『自由書』は加藤弘之の『天則百話』をそのまま借用している文章も多く、日本語の文章を直譯する傾向のつよいシリーズであり、「東籍月旦」は日本語の書籍の評介であるから、ここでは梁啓超はかつてと同じようにあくまで日本語として「經濟」という言葉を用いたと考えてよいだろう。

以上のように、一九〇二年五月から一九〇六年三月にかけての四年間は、梁啓超の創案にかかる「生計」という語彙が、Political Economy あるいは Economics の譯語として積極的に選び取られていた時期とみなすことができる。

三 「經濟」との葛藤

すでに見てきたように、嚴復あるいは梁啓超など、舊學の素養をもつ世代の知識人は、「經濟」という言葉に原義との混同の危懼を拭いきれず、その使用には躊躇せざるをえなかった。しかし一方で、中國で舊學の教育を受けないままに、あるいは受けたとしても血肉にならないうちに日本に留學してきた次の世代の若者たちには、そのような躊躇はほとんどなく、Political Economy あるいは Economics の譯語として「經濟」という日本語を抵抗なく中國語に取り入れた。

例えば、梁啓超とも比較的近い立場にあった譯書彙編社の社員たちも、そのような世代に屬する者が多くを占めた。これらの發行する『譯書彙編』には、リストの『國民經濟學體系』をはじめ、Political Economy 關係の翻譯がいくつか掲載されているが、リストの翻譯が(德)李士德『理財學』という題を採用している以外は、すべて「經濟」という語彙を用いている。第二年第九期(一九〇二年一月一日)からは掲載の文章が各ジャンルに區分されはじめるが、「政治」「法律」「歴史」などと並んで「經濟」のジャンルが設けられる。この「經濟」欄には「經濟原理」「經濟學之範圍及分類說」「近世經濟學之思潮」などの文章が掲載されている。また梁啓超のお膝もとである『新民叢報』でも、「雨塵子」というペンネームの人物が第一一號(一九〇二年七月五日)、第一四號(八月一八日)の「生計」欄で、「論世界經濟競爭之大勢」という文章を連載している。

このように比較的立場の近い若者たちであるかぎりには、梁啓超が原義への配慮から「經濟」を避けて、若者からはやや古めかしいと思われたであろう「生計」という語彙に固執しても、おそらくは並び行いて悖らずの状況であったに相違ない。しかし梁啓超はやがて、不俱戴天の論敵と中國近代史上もつとも有名な論争を展開することを餘儀なくされる時期を

迎える。

「反滿革命の是非をめぐって進められた『民報』との論戦は、帝國主義世界における中國の進路にかかわる問題であるだけに、論點は多岐にわたった。なかでも焦點の一つとなった土地國有化をめぐる論争は、經濟行爲の原動力を個人の欲望に求めるか否かにまで及ぶもので、ドイツにおける後期歴史主義經濟學派と社會主義經濟學派の論争が中國に所を移して再開された感があった。⁽⁹⁾民報側では多くの若い論客が入れ替わり立ち代わり登場してきたのに對し、新民叢報側は梁啓超がほとんど一人で論陣をはった。さらに日本留學中の若い中國人學生をおもな觀衆にして展開されたこの論争では、かれらに如何に訴えかけ、如何に自らの陣營に引き入れていくかも、重要な點であつた。かれら若い留學生に訴えかけるとともに、民報の若い論敵と渡り合っていくためにも、梁啓超は自らの信念に一部修正を加えざるをえなかつた。ドイツ後期歴史主義經濟學派の學說をベースにして土地國有化の非現實性を立證するに當たつて、梁啓超の「生計」という語彙は、古典の教養をもたない若者たちに、いささか古色蒼然の感を與えるばかりでなく、そもそも日本語の「經濟」という語彙を取り込み、驅使して論争を挑んでくる民報派に對して、「生計」という語彙で應酬していたのでは論争そのものがスレ違い、成立しない可能性さえあつた。

「生計」から「經濟」への轉換は、『新民叢報』第七七、七八號（一九〇六年三月二五日、四月八日）の「中國法理學發達史論」のなかで發生した。最初「此可以生計學理說明之也」（『飲冰室文集』一五、四六頁）と、從來どうりの表記ではじまつたこの文章も、やがて『民報』との土地國有化をめぐる論争で、重要な論點となる欲望の問題を議論する條では「其富國篇所論、由經濟的（生計的）現象、進而說明法制的現象、尤爲博深切明、謂離居不相待則窮、故經濟的社會爲社會之成始、謂羣而無分則爭、故國家的社會、爲社會之成終、其言爭之所由起、謂欲惡同物、欲多而物寡、欲者經濟學所謂欲望（德語之 Begierde 英語之 Desire）、欲多而物寡、即所謂缺乏之感覺（德語之 Empfindung des Mangels）而缺乏之

感覺、由於欲惡同物、人類欲望之目的物、如衣食住等、大略相同故也、荀子此論、實可爲經濟學社會學國家學等之共同根本觀念也」(同前四七頁)と、「經濟學」ばかりでなく、あれほど躊躇していた「社會學」すら、自分の言葉に取り入れて行論している。このウォーミングアップにつづいて、『新民叢報』第七九號(一九〇六年四月二四日)の「答某報第四號對於『新民叢報』之駁論(附錄原文)」、『新民叢報』第八二號(七月六日)の「暴動與外國干涉」、『新民叢報』第八四〇八六號(一九〇六年八月四日〜九月三日)「一九〇七年一〜二月」の「雜答某報(論問題五：一、自滿洲入關後中國果已亡國乎；二、今之政府爲滿洲政府乎抑中國政府乎；三、政治革命論與種族革命論孰爲喚起國民之責任心孰爲消沮國民之責任心乎；四、立憲政體之不能確立其原因果由滿漢利害相反乎；五、社會革命果爲今日中國所必要乎)」と進行していた『民報』との論戰文では、ただ一個所「未嘗因其趨重何業、而影響及於貧民生計也」(『新民叢報』第八六號、三九頁)と、どちらかといえば舊來の用法で「生計」が用いられている以外は、「經濟學者言生產三要素、一曰土地、二曰資本、三曰勞力」(同前一一頁)「吾以爲策中國今日經濟界之前途、當以獎勵資本案爲第一義、而以保護勞動者爲第二義」(同前二七頁)のように、すべて「經濟」という語彙で議論を進めている。

そして經濟論争のピークともいえるべき『新民叢報』第九〇〜九二號(一九〇六年一月一日〜三〇日)「一九〇七年五月(六月)」の「駁某報之土地國有論」では、「而就歷史上觀察人類之普通性質、以研究現經濟社會進化之動機、則私有制度(即以法律承認私人所有權之制度)雖謂爲現社會一切文明之源泉可也、蓋經濟之最大動機實起於人類之利己心」(『飲冰室文集』一八、二二頁)とか、「故在圓滿之社會主義、絕對不承認財產私有權、而求經濟動機於他方面者、固可行之、若猶利用此動機爲國民經濟發達之媒、而偏采此沮遏此動機之制度、則所謂兩敗俱傷者也」(同前二四頁)といった有名な主張をはじめ、何十個所も「經濟」という語彙が論戰に驅り出されている。

この時期には『民報』との論戰のほかにも、『新民叢報』第八九號(一九〇六年一〇月一八日)「一九〇七年四月」の

「社會主義論序」、「政論」第一號（一九〇七年一〇月七日）の「政聞社宣言書」、「世界大勢及中國前途」、「政論」第五號（一九〇八年七月八日）の「中國國會制度私議」、一九〇九年四月二〇日～五月五日の作といわれる『管子傳』、『國風報』第一期（一九一〇年二月二〇日）の「論各國干涉中國財政之動機」（實際は一九〇九年二月一日作）などでも、すべて「經濟」という語彙で統一されている。『新民叢報』後期から政聞社の時期にかけて、民報派との論争を頂點に、日本在住の若い中國人留學生を對象に論陣をはった梁啓超は、不本意ながらも「經濟」という言葉で、西歐近代の Political Economy の諸概念を移植する活動をつづけていたのである。この四年たらずの時期を「經濟」期とする所以である。⁽¹⁰⁾

しかしこの狀況も、一九〇九年十一月の宣統五年國會召集の上諭によって清朝の預備立憲が現實に近づき、梁啓超が言論活動の對象を中國國內の立憲派の知識人あるいは清朝の當局者に轉換しはじめると、再び一轉した。一九一〇年二月二〇日に創刊された『國風報』は、中國國內の立憲運動に指針を與えることを目的とし、その對象はまさしく舊學の素養のある國內の知識人であった。梁啓超は「經濟」では原義との混同を招きやすいという懸念に再度とらわれることになった。實際『國風報』に掲載された文章では、三五編もの多くが Economy の譯語に相當する語彙を使用している。先に指摘したように第一期の「論各國干涉中國財政之動機」はすべて「經濟」で一貫しているが、實際の作は一九〇九年二月一日であるということで除外すれば、それ以外の文章では第三期（一九一〇年三月一日）「滿洲鐵路中立問題」での「以致東三省市場成日本獨占之勢、使我國及他國不能爲正當之競争、而經濟發達將無可望」（『飲冰室文集』二五（上）、八六頁）、『國風報』第二年第八期（一九一一年四月一九日）「時事雜感 嗚呼一萬萬圓之新外債」での「其全國經濟界、非連年陷於憔悴萎黃之境耶」（『飲冰室文集』二七、六五頁）というただ二つの例外を除いて、すべて梁啓超の創案にかかると「生計」で一貫した用例が、『國風報』第二一、二〇期（一九一〇年五月二九日、八月二五日）の「論中國國民生計之危機」と題する文章を筆頭に七〇例ほどカウントされる。この狀況は一九一一年七月『國風報』の停刊以降も一年餘りは

繼續したように觀察されるので、この時期を「生計」回歸期と呼ぶことにしたい。

四 口語と文語

中華民國成立後に梁啓超が歸國すると、また様相は一變した。亡命先の日本から、雑誌の誌面を通じて書き言葉だけで、中國國內の知識人に立憲政治にもとづく國民國家の形成を訴えかけていた段階では、「生計」というやや古風な語彙で綴っても、ほとんど齟齬は生じなかったのだが、いざ歸國して中國の聽衆を直接前にして話し言葉で語りかけなければならぬ機會がふえてくると、*shang ji*と發音される語彙は單に古風の感をあたえるだけにとどまらず、そもそも何を意味するかさえ、とくに若い聽衆には理解されないといった狀況が生まれつつあったようである。そのため歸國以後の演説稿では、次第に人口に膾炙している「經濟」*jing ji*という言葉が壓倒的な優勢を占めるようになる。

歸國早々に行われた演説稿では、『初歸國演説辭』の題名でくくられる一連の演説のうち「涖北京商會歡迎會演説辭（一九二二年一〇月三〇日上午）」、「涖山西票商歡迎會演説辭（一九二二年一〇月三〇日下午七時）」の二稿では「經濟」という言葉で語りかけられているのに對して、「涖北京公民會八旗生計會聯合歡迎會演説辭（一九二二年一〇月三〇日下午）」、「答禮茶話會演説辭（一九二二年一〇月三十一日）」では演説稿であるにもかかわらず、まだ「生計」という言葉が踏襲されている。一〇月三〇日午後の演説は八旗生計會を聽衆とし、また一〇月三十一日の茶話會は八旗生計會をふくむ北京の諸團體を招いての答禮であるという事情を考えれば、「生計」という言葉が使われているのは、聽衆に對する配慮からでた措置と考えるのが妥當である。

その後は、『東方雜誌』第一四卷第二號（一九一七年二月一五日）の「在上海總商會之演説（戰後經濟競爭將更劇、商

民須克服依頼性和保守性、以適應時勢」、『申報』（一九二〇年三月一四日、一五日）の「在中國公學之演說（謂歐游最大收穫是了解歐洲的社會、政治、經濟基礎與中國不同、故中國不能效法歐洲）」から『晨報副刊』對俄問題討論第七、八、一一號（一九二五年一月一七日、二四日、一二月二日）の「國產之保護及獎勵（講演稿）」におよぶまで、一二編を數える演説稿はすべて「經濟」という言葉で埋め盡くされている。

その一方書き言葉では、歸國後も「生計」という語彙が生き續けるばかりでなく、さらに増殖さえする。『庸言』第一卷第一、二、四號（一九一二年二月一日～一九一三年一月一六日）の「中國立國大方針」（一九一二年四月作）での「今世界惟占優勝於生計界者、爲能安樂……故國家之榮悴消長、惟於國民生計競爭之勝敗決之」（『飲冰室文集』二八、四五頁）という例をはじめ、『庸言』『大中華』などの雜誌に掲載した、やや格調の高い文章あるいは肩を張った文章では、必ず「生計」という語彙が採用されている。

第一次世界大戰の後、西歐近代の國民國家に懷疑を抱き、世界國家の可能性に希望を託しはじめた時期における梁啓超の思想を探るうえで、『先秦政治思想史』は極めて重要な材料であるが、この著作の發端は『改造』第四卷第八期（一九二二年四月一五日）の「先秦政治思想（五月四日在北京法政專門學校講演）」という演説にある。演説稿の段階ではご多分に洩れず「他們從經濟上着眼、以爲社會所以有爭亂、都起於人類欲望的衝動」（『飲冰室專集』五〇、二〇四頁）と「經濟」が使われているこの文章も、「先秦政治思想史（一名中國聖哲之人生觀及其政治哲學）」と題する正規の論文として『晨報副刊』（一九二二年二月一二日～二〇日）に連載される段階になると、「文化演進較深之國、政治問題必以國民生計爲中心、此通義也……而其最大特色、則我國之生計學說、常以分配論爲首位、而生產論乃在次位也」（『飲冰室專集』五〇、五頁）という印象的な一句をはじめ、ことごとく「生計」という語彙で綴られている。

以上のように歸國後の梁啓超は、比較的格調の高い書き言葉の文章では「生計」、不特定多數の聽衆に語りかける話し

言葉の演説稿では「經濟」と、かなり明確な使い分けを實踐していたように見受けられる。したがってこの時期を並用期と呼ぶことにする。⁽¹¹⁾

むすび

梁啓超における「生計學」と「經濟學」の葛藤は、おもに Political Economy あるいは Economics の譯語としては、いずれが適しているかという二者擇一の問題から出發した。これら二つの語彙の選擇は、すでに長々と觀察してきた結果に明らかなように、それが使用される目的と對象に應じて何度か變化を繰り返してきた。梁啓超の個人的な嗜好、感性に忠實であれば、「生計」が最適であつたということはいまでもないが、辛亥革命をはさむ時期の激變をつづける中國社會では、もはや「經濟」でなければ通用しない狀況も生まれていた。⁽¹²⁾ このような中國社會との對話を繼續するためには、梁啓超は不本意ながらも臨機應變に「經濟」という語彙も使用せざるをえなかった。

しかし第一次世界大戰以降の時期になると、梁啓超にとつての「生計」は、たんに Political Economy あるいは Economics の譯語にとどまらない含意をもちはじめた。その手がかりとなるのは、『改造』（月刊）第三卷第三號（一九二〇年十一月十五日）から連載のはじまつた『清代學術概論』（原題は「前清一代思想之蛻變」、李國俊は一〇月作とする）の次のような一節である。「所謂『經世致用』之一學派、其根本觀念傳自孔孟、歷代多倡道之、而清代之啓蒙派晚出派、益擴張其範圍、此派所揭櫫之旗幟、謂學問有當講求者、在改良社會增其幸福、其通行語所謂『國計民生』者是也、故其論點不期而趨集於生計問題、而我國對於生計問題之見地、自先秦諸大哲、其理想皆近於今世所謂『社會主義』、二千年來生計社會之組織、亦蒙此種理想之賜、頗稱均平健實」（『飲冰室專集』三四、七九頁）。

そもそも梁啓超がドイツ國民經濟學說への關心を抱くようになったのは、それが『新民說』に代表される國民國家形成への構想にとって、缺くことのできない學問體系の一部と認識されたからにはかならない。しかも梁啓超の知的營爲の一つの特色は、西歐近代學說を受容する過程において、つねに西歐近代學說のスケールを用いて、中國の舊學を計測しなおし、新たな評價基準を設定する姿勢にある。すでにドイツ國民經濟學說受容の段階において、梁啓超は國民經濟の觀點から春秋戰國期の思想家たちに再評價の光をあて、孟子によって覇業と排撃された管子の思想を中國における國民經濟學說のプロトタイプと評價しなおし、『管子傳』を執筆して、その顯彰につとめた。

一種の附會説と考えてもよいこのような梁啓超のスタンスは、第一次世界大戰の慘劇から國民國家への懷疑を深め、世界國家の構想へと舵をきりかえるプロセスでより顯著になっていく。折からの「國故整理」の流れのなかで、梁啓超は新しい理想を價值基準とする觀點から中國の舊學を再發掘し、管子の國家主義にかえて儒家の世界主義、社會主義に軸足を移していく。このような價值基準の轉換の過程で、儒家の經世思想は西歐近代の政治、經濟學說と少なくとも對等あるいはそれ以上の價值をもつものとの意識されはじめていた。かつて日本亡命時期に、『新民叢報』第三號（一九〇二年三月一日）の「論中國學術思想變遷之大勢」で「蓋し大地今日只兩文明を有するのみ。一は泰西文明、歐美是なり、二は泰東文明、中華是なり。二十世紀は則ち兩文明結婚の時代なり」（『飲冰室文集』七、四頁）と述べた氣概は、決して一時のロマンティズムではなく、終生の確信となった。その梁啓超にとって「生計學」は、いまや Political Economy を中國に移植するために考案した譯語という段階を超越して、いわば中國固有の經世思想と西歐近代の經濟學說との止揚をめざす一段高次の學問體系として構想されはじめていた。『清代學術概論』の上掲の一節はそうした梁啓超のスタンスを傳えているように讀める。「生計」という語彙は梁啓超の思想的營爲における最終局面で、西歐近代の Political Economy と儒家の「經國濟世」を統合する新しい概念に昇華しはじめていたのである。並用の段階でもとくに一九二〇年一〇月以降

の時期を超克期としたのは、以上のような事情からである。

(1) 注

日本亡命時期における梁啓超の代表作ともいえる『新民說』は、一九〇二年二月の『新民叢報』創刊とともに掲載がはじまり、一九〇三年の二月から十二月まで一〇カ月以上におよぶアメリカ訪問を挟んで、一九〇六年一月の第七二號で完了しているが、この四年近くの間に計二四回使われている Evolution の譯語は、嚴復の考案した「天演」から、やがて日本で定着していた「進化」へと切り換った。その分布は、冒頭第一節敘論の「此百十國中、其能屹然獨立、有左右世界之力、將來可以戰勝於天演界者、幾何乎。曰四五而已矣」(『飲冰室專集』四、一頁)から第十七節論尙武の「柔脆無骨之人、豈能一日立於天演之界」(同前一一八頁)まで合計一三回「天演」という語彙が用いられているのに對し、「進化」という語彙の方はやや孤立的に第十一節論進步(一名論中國羣治不進之原因)で七回集中しているのから飛んで、第十八節論私德の「進化主義」(同前一三六頁)から第二十節論政治能力の「然則凡欲望皆生於必要而已、而其必要之事物愈多、則其欲望愈繁、而文明之程度愈高、此民族進化得失之林也」(同前一五四頁)まで最終の三節で四回使われている。各節の執筆時期を嚴密に確定する作業の結果をまつ必要があるが、文章の表題をみて、『新民叢報』第三號(一九〇二年三月一〇日)の「天演學初祖達爾文之學說及其略傳」から『新民叢報』第一八號(同年一〇月一六日)の「進化論革命者頌德之學說」へと轉換していることから判斷すれば、轉換の時期は一九〇二年の半ばから一九〇三年にかけてと推定しても大差はないであろう。

(2) 鄭觀應は「與子姪論商務書」の「今之世界一商務競爭之世界。商務盛之國則強、商務衰之國則弱。我國商務不能及泰西各國者、固由於缺商本無商學之商才、其彰明較著也」(『鄭觀應集』下冊 上海人民出版社

(3)

一九八八年、六二二頁)のように「商學」あるいは「商務」という言葉を用いた。「致潘蘭史徵君書」の「承示吾國年來百貨騰貴、民不聊生、政府徵稅斂財、不暇為窮民代籌生計、只知各懷私利、不知寓生計於教育之中。外國教育愈進化、而人民生計有愈發達之法、言之深太息」(同前下冊、六四〇頁)のように、「生計」という言葉も使っているが、おおむね舊來の用法にそったもので、Economy の譯語とは見受けられない。

一九〇二年九月二日の『新民叢報』第一五號で「山陰孫鄭齋」を名乗る人物からの質問に答え、梁啓超は「鄙人初但東時、從同學羅君學讀東籍。羅君為簡法相指授。其後續有自故鄉來者、復以此相質、則為草和文漢讀法以語之、此已亥夏五六月間事也」と述べている。またこの『和文漢讀法』と「東籍月旦」、羅普著『和文奇字解』を合體して『東學津逮三種』と題する書物を出版する計劃もあったという。

(4)

狹間直樹「梁啓超—日本關係日表(一八九八—一九〇三)」『中國近代における日本を媒介とする西洋近代文明の受容に關する基礎的研究』平成六—七年度科學研究費補助金一般研究C研究成果報告書 平成九年三月。

(5)

嚴復は『原富』譯事例言で「計學」を譯語とした經緯を次のように述べる。「計學、西名葉科諾密、本希臘語。葉科此言家、諾密為羈摩之轉、此言治言計、則其義始於治家。引而申之、為凡料量經紀擲節出納之事、擴而充之、為邦國天下生食為用之經。蓋其訓之所苞至衆、故日本譯之以經濟、中國譯之以理財。願必求吻合、則經濟即嫌太廓、而理財又為過狹。自我作故、及以計學當之。雖計之為義、不止於地官之所掌、平準之所書、然考往籍、會計計相計借諸語、與常俗國計家計之稱、似與希臘之羈摩較為有合、故『原富』者、計學之書也」。また難解に過ぎるとの梁啓超の批判に對しては「與梁任公論所譯原富書」に

- において、「不佞之所從事者、學理濫觴之書也、非以餉學僮而望其受益也、吾譯正以待多讀中國古書之人」(『嚴復詩文選』人民文學出版社一九五九年、一五四頁)と反論している。
- (6) この分類は金井延『經濟學』中央大學 一八九四年、夏秋龜一『最新經濟論』濟美館 一九〇〇年などに依據している。
- (7) 李國俊『梁啓超著述繫年』復旦大學出版社 一九八六年の卷末に列舉されている抄本の一冊である「人羣生計學(一名社會經濟學)」は、このような躊躇の時期の產物であらうか。
- (8) 『新民叢報』の實際の發行時期は奥附の記載よりも、最大で六ヶ月遅れているケースがある。以下カッコ内には實際の發行年月と推測されるデータを記す。その根據については、狹間直樹編『共同研究 梁啓超』みすず書房 一九九九年の附録二を参照のこと。
- (9) 梁啓超が個人の欲望の經濟學的な意味を考察するにあたっては、ドイツ後期歴史學派およびアメリカ制度學派のつよい影響をうけていた時期の河上肇が執筆した『經濟學原論』上卷 有斐閣書房 一九〇五年から大きな示唆を得ている。
- (10) この時期、嚴復が譯書局總辦の任にあつた京師大學堂では、購入した經濟學關係の洋書をすべて「計學」の譯語で記録していた。例えば J. Keynes, *The Scope and method of Political economy*, London, 1897 は凱因思『計學界術』A. Marshall, *The Economics of Industry*, London, 1884 は馬協律『實業計學』Pantaleoni, *Principi di economia pura*, 1889 (京師大學堂が購入したのはたゞん英譯版であらう) は彭忒里昂『計學純理』L. Cossa, *The Intro-*

- duction to the study of political economy*, London, 1893 は路奇乃沙『計學宗派錄』といった次第である(北京大學校史研究室編『北京大學史料』第一卷 北京大學出版社 一九九三年、四九八〜五〇七頁)。
- (11) 辛亥革命以降でも、『新青年』第三卷第二號(一九一七年四月一日)の章士釗「經濟學之總原則」で、經濟學の總原則は最少の努力で最大の効果を求めることにあり、中國の「儉」という言葉と同義であるから、中國では「儉學」といってもよいと主張してみたり、『北京大學月刊』第一卷第二號(一九一九年二月)の「法科研究所研究錄」で、通訊研究員俞逢清の「經濟の義は至って廣範であるから、……むしろ生計に改めたほうがよいのではないか」という質問に對して、馬寅初が例のようにギリシャ語の原義から説きおこして「經濟」を擁護しているといった事例がある。だが、これら二つの事例はむしろ中國社會で「經濟」という語彙が定着しつつあった傾向の裏返しと考えた方がよいであらう。
- (12) しかしこの時期でも、梁啓超は書き言葉でどうしても「經濟」を使わざるを得ないケースがあるという。『庸言』第二卷第一・二號(一九一四年二月一五日)の「述歸國後一年來所感」に「所感一、人材之不經濟 不經濟云者日本名詞也、吾未能得一切當之語以釋其義、故借用之、大抵凡物之在宇宙、各有其效用、而以時間配置之得宜、能發揮其效用至最大限度、斯謂之經濟、反是則謂之不經濟」(『飲冰室文集』三二、二四頁)と述べるように、「不經濟」という語だけは「不生計」では代替できないと考えていたのである。